'90s

ナインティーズ

'90s

橋本治

小学館

'90s
ナインティーズ

一九九一年七月二〇日　初版第一刷発行
一九九一年八月二〇日　初版第二刷発行

著者――橋本　治
出版者――相賀徹夫
発行所――株式会社小学館
〒101-01　東京都千代田区一ツ橋二-三-一
電話　編集〇三-三二三〇-五八〇二
業務〇三-三二三〇-五三三三
販売〇三-三二三〇-五七三九
振替　東京八-二〇〇番
印刷――大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。製本にはじょうぶん注意しておりますが、万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。

©Osamu Hashimoto 1991　Printed in Japan
ISBN4-09-389341-1

ナインティーズ　目次

PartI　ノンシャラン巷談'90

トレンド時代の淋しい1億1750万人　……9
苦悩のないシーンが曝す「建前の社会」　……16
『バットマン』の面白さを理解するためにも啓蒙が必要じゃない？　……23
アナーキズムを喪失した雑誌はどんどん衰弱する　……32
筋肉が実用だということを忘れるから、ケダモノの臭いがなくなる　……40
女が酒飲む豊かさを与えられないところが男の貧乏なんだ　……47
オフィスビルの軒に洗濯ロープを渡せば生活感覚が戻ってくる　……54
新品の世界にいるともう一遍アイデンティティーを獲得したくなる　……60
親しみやすさの花盛りで空疎なコミュニケーションがすべっていく　……68

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

PartII 89+1

1、+1（プラスワン）のあとがき……79
2、二つの演説――東京の野党篇……85
3、二つの演説――田舎の与党篇……91
4、都会でもなく田舎でもなく、○でもなく×でもなく……97
5、社会主義の失敗……104
6、どうして政党を作らないんだろう？……110
7、葛藤のない息子達……116
8、可能性のない若さになんの意味があるんだろう？……123
9、アメリカ協力法案について……128
10、男のくせになにやってんだ？……134

11、〝アイデンティティー〟といふこと――その1……141
12、〝自分探し〟なんてやめちゃいな……147
13、〝アイデンティティー〟といふこと――その2……153
14、植民地としてのヨーロッパ……160
15、宗教改革の中の反動要素……166
16、神からの独立……172
17、「牝犬の息子（サノバビッチ）！」と「お前の母さんデベソ！」の差について……178
18、制度は別に〝神〟じゃないのに……186
19、〝世界の終わり〟がやって来た……191
20、男性原理の世界……198
21、〝パレスチナ問題〟はホントに〝宗教の問題〟なのか？……204
22、謎の〝皇国史観〟……211
23、市民と民衆……217

24、指導者のいないファシズム——日本 ……223
25、ファシズムのすべて——国家とはなんぞや篇 ……229
26、ファシズムのすべて——主義でもない主義の民族主義篇 ……236
27、ファシズムのすべて——結局近代は金だよ篇 ……242
28、ファシズムのすべて——王国の逆襲篇 ……249
29、近代は本当に近代か？ ……257
30、将軍様と儒教の現代 ……262
31、男性原理の冬 ……268
32、産業革命は本当にそのままでいいのか？ ……274
33、というわけで、当然、熱帯雨林をどうするのか？ ……280
34、第二の第二次世界大戦、あるいはバクダッドに東京を見る ……288
●よく分かる'90S世界史年表 ……301

ブックデザイン　坪内祝義
編集協力　K&K事務所

Part Ⅰ ノンシャラン巷談'90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

トレンド時代の淋しい1億1750万人

今って流行にのる人間ばっかりだっていう気がするんだ。

なんにも情報のないまっさらな状態で、自分の目で見て「あ、これおもしろいよな」って発見できるノリの人間はかなり自由な人間だよね。直感ていうのはそういうもんなんだけど、〝感性〟っていう言葉がはやり言葉になって以来、そういう人間が逆に少なくなったと思う。直感にたけた人間は、流行を作り出すことはあっても、流行にのせられるってことはないんだけど、時代が流行にのっかる人間ばっかりをもてはやすようになっちゃったものだから、かえって流行が動かなくなったんだね。

例えば、映画なんかでも、「おもしろかった」っていう情報がメディア経由でやって来て、自分も「おもしろい」って言わなくちゃいけないんじゃないかと思う。だから、それがメディアで

話題になってる間は、「おもしろい」って言うね。テレビに雑誌各メディア一斉に「おもしろい」って言ってるんだから、消費者は反復学習の結果「おもしろい」って言えるようになるんだ。

でもそれが本当におもしろいかどうかは分からない。自分の感性にちゃんとそれが直結してるのかどうかってことを考えてないから、自分で「おもしろい」と言ったそのことが、自分なりのおもしろさをつくるってことには続かないの。みんな真似になって流行のコピーを作るだけね。

友達同士の口コミで、ビデオって流行するでしょ。「あれおもしろいよ」って誰かが言う。それでレンタルビデオ屋に行って借りて見る。「おもしろい」って言われて借りに行ったんだから、絶対に「おもしろいんだろうな」と思って見る。そう思って見るんだから、そこそこにはおもしろく見れるよね。でもそれって、当人がオリジナルでおもしろさを発見したんじゃないもの。人の言う「おもしろい」をなぞって〝仲間うちの呪縛力〟に縛られただけなんだ。「どうだった？」って訊かれて、「つまんない」とも言えないから「まァね」と言っちゃう。「いい」でもなく「悪い」でもなく、「まァね」なんだ。「つまんない」って言われたら、「お前、変わってんな」で終わりでしょ。近所付き合いしないビジネスマンにとって、雑誌っていうのは最大の友達でしょ。仲間はずれにされたくないから、一生懸命〝学習〟をしてんだよ。

そういう風潮に商売がからむと、トレンドってことになるんだよね。

だってここ何年もの間、２５０万という数字がずーっと動いてる。『サラダ記念日』が２５０万部で、『ノルウェイの森』が80万部とかいうんだったらまだ話はわかるの。でもみんな〝２５

0万〃で、それが流行の単位としてそのまんま動くの。毎年〃250万〃がひとつあって、それ以外にベストセラーはないの。売れるか売れないかが極端で、〃売れる〃ってことの意味が違って来ちゃったんだよね。ビジネスマンがトレンドにやっきになるのには、そういう側面であるよね。

『サラダ記念日』が売れたのは、俵万智が「私は二十何年か生きてきて、これで全部をチャラにしてもいいはずだ。それでやっと私はスプリングボードの上に立てた、さあ飛びます」というそれだけのことを歌ったからだと思う。森光子があれを読んで、「体が震えるように感動した」と言ってるのは、そういうことでしかないと思う。あれが保守的だのなんだのを言ってもしょうがないんだよ。あそこにあるのは「全部を過去にする歌」なんだから。「今までがこのように関係なくなるというのは、なんて快感なんでしょう」というマニュフェストで、あれはある意味での〃引退宣言〃なんだから。

『サラダ記念日』に〃その後〃はないの。250万部売り切って、その後はなし。あそこにあるのは全部架空の風景で、あの風景を自分の現実として持ってる女の子が、自分の日常をフレームアップするために出て来たんじゃない。それだったら短歌というオリジナルな創作にはならないもの。

松任谷由実は逆だね。自分とは関係ないところに存在する若い女の子の生活を、想定して作ってる。それを延々と作り続けてる。俵万智は「保守的な世界をゼロにしちゃった」ようなもんだ

から、そこから先は難しいんだけど、松任谷由実は虚無を前提にしてるんだもの、その気があれば無限に続く。ユーミンのレコード『ＬＯＶＥ　ＷＡＲＳ』が、初回プレス１５２万枚とかっていうじゃない。すごいよね。虚無を対象にするってことは、売り続けることでしかないんだから。一回やめたら次がなくなっちゃう。だから、似たような〝その次〟をめざして、似たような〝現在〟がある――永遠を信じさせるって、そういうことだけどね。

前回のＬＰは今回のための宣伝だったというような出し方を、いつも彼女はしてると思う。前回にコンセプトの骨組だけを出して、「トレンドはだめ押しをしないかぎり儲けにはならないよ」って形で次のが出てくる。あの人は基本的に「博打が面白い」という、それだけの人だと思う。「これは今回たまたま当たった博打よ。前回はそんなに大きく張らなかったの」って、それだけで来て、今じゃ世の中全体が博打になっちゃったから、博打がビジネスになったという、それだけだと思うな。

俺は松任谷由実に全然興味ないけど、女は違うわけでしょ。それだけ女は進歩してないというか、女性週刊誌は不滅ってことかな。松任谷由実のすごさは、十年間変化しないってとこでしょ。松任谷由実のあり方は、一昔前のジュリー＝沢田研二に似てると思うね。常にあるレベルを演じ続けるという。でも、普通の人間は、〝そればっかり〟をやってると、辛くなって変わるもんだよ。大人の男とか、大人の女ってところに行きたくなって、それで消えるんだ。松任谷由実はそれをしなかった。成長を拒めたってところがあの人のすごさだけど、三十歳になっても象にしか

乗れなかったジレンマだってあるとは思うよね。

あの人、歌が下手でしょ。歌手として勝負するよりも博打で勝負してたから、ずーっともってたんだとは思うけど、実質のない子にそんなことを感じさせないで、「この情景に、あなた覚えがあるはずよ」だけでセールスやってたのはすごいよね。みんなユーミンを〝自分の存在しなかった青春〟として納得しちゃう。ある時期から、日本の青春というものは、〝存在しなかった青春〟という形でせつなくなっちゃった。「きっとこういうものはホントだったら〝青春〟として誰にでもあるはずのものなんだろうけど、自分は遂にそれに巡り会えなかった」って、日本の女の子はみんな〝青春〟に失恋してるんだな。男に振られたんじゃなくて、輝かしかるべき青春の時期に振られて、そこをユーミンに刺激されて、「分かる……」って言うんだ。松任谷由実は、ジュニア雑誌とおんなじで、〝時期〟だよね。その時期過ぎてあの情景だけで生きてったら、内容がなくて自分の権利だけ主張したい女になっちゃう。「ユーミンのなんとかにあるでしょう」とかって言うのを聞くと、「ああこの子の空虚はここか」と思うものね。俺はそれを〝欠落〟のバロメーターにはしてる。

なんかある意味で、松任谷由実自身がひとつの実験だよね。虚偽が、どれだけあくどい世の中をだまくらかすかっていうさ。彼女のこと評価する人はさ、商売人としての腕を全部評価してるわけでしょ。「あそこまで自分の内面性を無関係ってことにしてなにかを表現するってこと、俺たちには出来ないよな」っていう。男ならみんなそう思うでしょうね。

ある意味で、松任谷由実と松田聖子はすごく近い。歌の中に処女性が一貫してるという点でね。今はお互いに嫌ってるっていうんなら、エリザベス一世とメアリ・スチュアートってことになるのかな、あの二人は。

松田聖子ってさ、「男を知った処女の娼婦」だと思う。松本隆の作ったコンセプトは、そうだと思う。男はそういうものを必要として、その「完璧なる矛盾」を松田聖子は演じてスターになったんだ。今の松田聖子の誤解は、「男を知った処女の娼婦」なんていうものが、現実に果して存在しうるのかどうかってことを考えてない、そのことにつきるね。あの人の発言の「矛盾だらけでも平気」っていうのを見てると、そう思うよ。「それを男が作ってくれて、私のために与えてくれたんだから、男達の世の中はそれを許してくれるはずなのに、どうして？」って、彼女はそれしか言ってない。

で、松任谷由実は、〝女の立場で作られた松田聖子〟でしょうね。「存在しなかった青春」という処女性を守るために、心ならずも女は〝現実〟という娼婦性を獲得しなきゃならないという。そのコンセプトには、確かに〝２５０万〟がのれるんだよ。

俵万智があって、それから村上春樹や吉本ばななに行って、ユーミンがいる。男としてはサザンかな。そのずっと前には赤川次郎がいた。ある意味で、ここはテレビとは関係のない世界で、そこに〝２５０万〟という金鉱があった。それって、別の言い方をすれば、「大衆相手に商売をしてたビジネス社会とは別のところに」ということだけど。２５０万というのは、だから全国民

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com